

令和 5 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属駒場中・高等学校	校長名	北村 豊
幼児・児童・生徒数（R6.3.1現在）	中学 368 名 高等学校 486 名	学級数	中学 9 高等学校 12

2 教育目標等	
① 学校教育目標	「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」の理念のもと、生徒自ら学ぶ態度の涵養に努め、国際社会で活躍できるトップリーダーの育成をめざす。
② 学校経営方針	学校教育目標達成のため、本校の伝統的な全人教育を基盤に、本学附属学校が定めた3つの拠点（「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」）構想の成果を活かし、筑波大学との連携の下、4つの校内プロジェクトを中心に全校体制で取り組む。先導的教育拠点として、これまで継続してきたSSHの研究成果をまとめ、発信するとともに、SSH後の教育方針を定める。また、新事業「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」を推進する。教師教育拠点として、本校の教育活動の発信を図るとともに、学校見学を積極的に受け入れ、交流を図り、中等教育の発展に寄与する。国際教育拠点として、生徒の海外派遣や国内での国際交流を通して、国際社会で活躍できる人材の育成を目指す。また、ICTを活用したオンライン国際交流とリアル国際交流を併用し、より充実した交流を目指す。
③ 重点目標	<p>新事業「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」を推進するとともに、下記の4つの課題について全教職員で取り組む。</p> <p>① 「駒場」の生徒観・学校観・教育観に関すること：専門家による教員対象のインタビューを実施し、「生徒観」「学校観」「教育観」の変遷を言語化し、理論面の検証を行う。</p> <p>② 「駒場」の環境デザイン－空間・時間・人間－に関すること：本校の空間・時間が、人間形成や人間関係の構築の面でどのように機能し、いかなる価値を持つかを捉え直し、未来の環境デザインを考える。</p> <p>③ 「駒場」レガシーの継承と活用に関すること：より日常的なOB活用のあり方を検討する。また、地域貢献の観点から、筑駒アカデメイアと目黒区連携講座の運営を行う。</p> <p>④ 「駒場」らしい国際交流 その将来性に関すること：今までの国際交流を整理しつつ、23/24年度の交流活動を通して、駒場らしい国際交流の特質を明らかにする。その際に、国際交流に参加した生徒の価値観・考え方の変化に焦点を当て、駒場らしい国際交流活動を充実させるために、どのような物理的・人的・金銭的な支援が必要になるのかを整理する。</p>

<p>④ 前年度（令和4年度）の成果と課題</p>	<p>下記4プロジェクト（2021年度に設定）を中心に、ポストコロナを見据えた教育環境の整備、教育のグローバル化に係る調査・研究・検証を全教職員で推進した。その成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <p>① コロナ時代の学校生活プロジェクト：生徒を対象にしたアンケート調査や教員を対象にした学習会・ワークショップなどを実施し、学校生活の課題を整理しながら学校行事などの改善や働き方改革につながる提言をまとめた。</p> <p>② 駒場流不易と流行の教育デザインプロジェクト：本校が培ってきた「学び」の本質をとらえるべく、教員同士による授業研究、探究学習の評価研究、オンライン環境の課題検討などを行い、職員間の共有を図った。</p> <p>③ 駒場レガシーの継承と活用プロジェクト：卒業生との連携、地域との連携を軸とし、教駒・筑駒が育ててきた「力」を活用・発信すべく、卒業生による講演会、生徒も参加した地域住民向けワークショップなどを実施した。</p> <p>④ 対外交流再構築プロジェクト：他校、海外学校、近隣施設との交流を、オンラインも活用しながら推進した。また、海外大学へ進学した卒業生による座談会やプレゼンテーションスキル向上の講座を在校生向けに実施した。</p> <p>【課題】</p> <p>ポストコロナにおける、学校生活（授業・行事・クラブ活動）の安定化した運営を行う。およびそのノウハウの蓄積し、継承する。</p>
---------------------------	---

<h3>3 重点目標達成についての総括的評価</h3>	
<p>新事業「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」においては、運営指導委員の指導の下、調査アンケートを実施、その検証に取り組むなど、事業を推進することができた。また、下記の4つの課題について全教職員で取り組み、その成果は次の通りである。</p> <p>① 「駒場」の生徒観・学校観・教育観に関すること：学外教育関係者による授業の参与観察を実施し、本校の「生徒観・学校観・教育観」について意見交換を行うことができた。</p> <p>② 「駒場」の環境デザインー空間・時間・人間ーに関すること：生徒用3Dプリンタなど、生徒の興味関心を引き出すようなICT環境を整備し、その成果を検証することができた。また、図書館や保健室などの校内施設に対する生徒の好ましさの観点での実態調査を実施し、特に、特定分野に特異な才能をもつ生徒の学校適応に対して効果的な学習環境や対人環境の構築の仕方について検証を行った。</p> <p>③ 「駒場」レガシーの継承と活用に関すること：目黒区連携講座や筑駒アカデミア公開ワークショップ・公開講座を開催し、地域交流が実施できた。また、OB講演会を開催し、卒業生と現役生との繋がりを深められた。SSH予算減額にともなう教育活動への影響を検証し、OBからの支援活動も含め、対応を検討し実施できた。</p> <p>④ 「駒場」らしい国際交流 その将来性に関すること：海外校との交流会を、コロナ以前のような形態に再開できた。また、海外大学進学希望者などへの支援体制などについて他校と情報交換を行い、その可能性を検討することができた。</p>	

4 令和6年度の学校課題

「国の拠点校」「地域のモデル校」として、大学との連携の下、実験的・先導的な教育課題への取り組みと長期的視野に立った教育環境の改善を重点目標に定める。また、校舎の老朽化を補う環境整備の計画を安全・安心の観点からも推し進める。さらに、「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」事業を推進する。本年度は、以下の課題について取り組む。

- (1) 4つの校内プロジェクト2年目として、次の各課題について研究結果をまとめる。
 - ① 駒場の生徒観・学校観・教育観を考える：教員インタビューなどを実施し、さらに意識共有を図る。
 - ② 駒場の環境デザイン－空間・時間・人間－を考える：前年度の検証結果を分析し、将来構想へとつなげていくことをめざす。
 - ③ 駒場レガシーの継承と活用を考える：現役生を支援したいと考える卒業生たちとの交流の場の設定を検討していきたい。
 - ④ 駒場らしい国際交流 その将来性を考える：研究交流の内容を精査し、よりグローバル人材を育成できるプログラミングを構築できる方策を検討する。
- (2) 「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」事業2年目のまとめと報告。
- (3) 22年間継続してきたSSHの研究成果を、認定校として発信する。
- (4) 校務分掌を見直し、教職員の働き方の改善を図る。
- (5) 情報セキュリティについての意識強化を図る。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

「4 令和6年度の学校課題」に向けて、全教職員で取り組んでいく。

- (1) 4つの校内プロジェクトに分かれ、研究結果をまとめる。(①～④は上記に対応)
 - ① 専門家による教員対象のインタビューを実施し、「生徒観」「学校観」「教育観」の変遷を言語化し、理論面で検証してもらう。
 - ② 「駒場」の空間・時間が、人間形成や人間関係の構築の面でどのように機能し、いかなる価値を持つかを捉え直し、未来の環境デザインを考える。具体的には、図書館や保健室など、教室外の「空間」や、学校行事や部活動、休み時間など、生徒や教職員が授業外で共有する「時間」に着目し、駒場に集う「人間」(駒場で育つ生徒やそこで働く教職員)にとって望ましい環境デザインを考える。
 - ③ 卒業生との連携について検討・実務にあたる。また、地域貢献の観点もふまえて運営を行う。また、より日常的な「OB活用」のあり方を検討する。
 - ④ 研究交流・文化交流を軸に、本校主催の国際交流プログラムの支援や、スクールプロファイルの作成・海外大学進学者による座談会の実施等の海外大学進学支援や、国際交流・海外留学に関する情報共有体制の構築等を行う。
- (2) 「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」事業について、専門家を招き、調査結果の検証をまとめ、報告する。
- (3) SSH認定校として、研究成果を広く発信する方法を検討し、自走化への方策を探る。
- (4) 教職員の働き方の改善を図るために、校務分掌等を見直し、新しい枠組みを作る。
- (5) 情報セキュリティについての意識強化をめざし、研修等を推奨する。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- ・『筑波大学附属駒場論集第63集』筑波大学附属駒場中・高等学校（2024.3）
（教員の個人・教科グループ等による研究成果は、上記論集 p.123～145 に掲載）
- ・『平成29（2017）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書 経過措置2年目』筑波大学附属駒場中・高等学校（2024.3）
- ・『2023（令和5）年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」研究報告書』筑波大学附属駒場中・高等学校（2024.3）
- ・『第50回教育研究会報告書』筑波大学附属駒場中・高等学校（2023.11）
- ・生徒の活動一覧（国際科学オリンピックでのメダル獲得など多数）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和5年度

学校名

筑波大学附属駒場中・高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>体験的な学習として、中1と高1ではケルネル田圃での「稲作実習」を実施した。また、フィールドワーク中心の実践的な学習として、中2では「東京地域研究」(2日)、中3では「東北地域研究」(3泊4日)、高2では「関西地域研究」(4泊5日)を実施した。さらに、高3では年間を通して「総合発表」に取り組み、文化祭でその成果を発表した。</p> <p>主体的な探究学習としては、中3では「テーマ学習」、高2では「理科探究基礎・総合的な探究の時間（ゼミナール形式）」、高3では「課題研究（個別研究）」を実施した。また、教科主体で企画した「水俣実習」(3泊4日)、他校との合同企画「ふくしま学宿」(2泊3日)、「ネクストジェネレーション・ミーティング」(2泊3日、長崎)なども実施した。</p>
1-2-4	学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進の取組状況	<p>専門性を有する司書を継続して雇用し、学術コンテンツ・学習リソースが活用可能な図書メディアセンターの充実に努めた。その結果、図書館は「読書センター」としての機能だけでなく、「学習センター」「情報センター」としての機能も有し、さらに、Wi-Fi環境の整備・強化、BYODの導入なども含め、隣接するコンピュータスペースと連関を保ちながら、読書活動の効果を高めた。</p>
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>本校の学校行事の計画・準備は、生徒で組織する各実行委員会がその中心的な役割を担う。構成する委員が互いに協働する「場」が自主的・自律的な行動を自然と促し、リーダーシップとフォロアーシップを涵養するとともに、その精神を学校全体に浸透させる。実行委員会の枠組みは、学校行事・高校行事・中学行事・学年行事・クラスなどと様々な行事で存在し、それぞれに取り組むことから、多くの生徒が責任をもって関わることで、いろいろな立場で経験を積むことができる。</p> <p>令和5年度は、各学校行事への新型コロナウイルス感染症の影響がなくなり、委員会活動がコロナ以前の体制と比べてどのような変化が起きているかを検証した。</p>
6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>高2の課題研究の一つである「障害科学・ともに生きる」では、筑波大学附属大塚特別支援学校、聴覚特別支援学校のほか大学・研究機関、卒業生等の協力のもと、さまざまな障害を持つ方々や関係者との交流や研修を通して、学習を進めた。</p> <p>また、その取り組みを地域の学校（目黒区の小学校）のインクルーシブ教育活動で発表し、普及を図ることができた。</p>

12-1-4	大学、附属学校教育局と連携した多様な学習内容・学習形態などに対応した整備の状況	70周年募金活動によって得た資金をもとに、多様な学習形態に対応できる特別活動室の建築を大学と連携しながら進めてきたが、必要となった地盤改良や高騰した資材コストなどにより建築費が嵩み、計画を見直していたところ、大学執行部主導の将来構想計画で駒場キャンパス全体のリニューアル計画が提言され、新会館も含めたりリニューアル計画を進めることになった。
12-1-5	大学、附属学校教育局と連携した学校教育の情報化の状況	Google Workspace for Education、Microsoft Teams、Adobe Creative Cloud等を全学年で導入し、授業コンテンツのさらなる充実化を図るとともに、GIGAスクール構想で整備されていた中学ホームルームのICT環境を、高校ホームルームおよび特別教室へと拡張した。また、高校の端末機器は、生徒の学習効果を考え、BYODで対応することとした。
14-1-3	先導的教育研究	SSH研究開発事業では、探究型学習の教材開発と「理数探究基礎」や「総合的な探究の時間」の実践を進め、その成果を、全国のSSH生徒研究発表会や台中市立第一高級中学と2回（本校と台中一中）行った生徒研究発表等を通して国内外に積極的に発信した。また、主体的な探究活動を支える基礎力育成を目的として、理数以外も含め、各教科が専門家による特別講座（講演・実習等）を企画・実施した。 さらに、国立教育政策研究所の実践研究協力校として、理科（物理）の研究を進めた。また、「筑波大学訪問」を高校2年と中学3年を対象に実施した。
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習を年2回（3週間ずつ）実施するとともに、「第50回教育研究会」（国語科・数学科・保健体育科・美術科）を開催した。また、「SSH数学科教員研修会」を新潟県立新潟高等学校で開催し、授業の様子を含めた日頃の教育活動やSSHで得た成果を発信した。さらに、筑波大学の教職課程の「総合的な学習の時間の指導法」の講義において、本校教員がその一部を担当した。
14-1-5	国際交流・国際貢献	科学分野の研究交流として、SSH研究開発事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究発表会を、本校と台中一中で相互に行って開催した。文化交流として、長年交流のある釜山国際高校と、同じく本校と釜山国際で相互に行って開催した。また、台湾と韓国で交流を拡げること考え、視察を行った。 研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「SSH英語プレゼンテーションワークショップ」や「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立って実施した。
14-1-6	社会貢献	本校の人材（生徒・教員・卒業生・保護者）を活用し、「筑駒アカデミア」事業を実施した。まず、本校生徒を対象とした講演会の映像を地域（世田谷・目黒）住民に向けオンデマンド配信し、「公開講演会」とした。また、外部の専門家、教員、生徒が講師となった「公開ワークショップ」と、10講座の「公開講座」を区民向けに開催した。さらに、目黒区が主催する区内等教育機関への講師派遣や教員と生徒が一体となって行う地域の小学校（東京都目黒区と茨城県大子町）への出前授業も実施した。